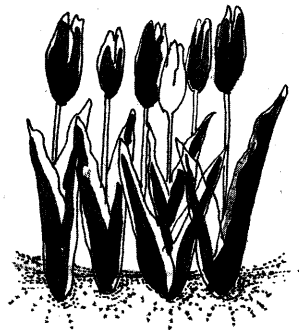


# 附属幼稚園の教育(1) 四月

村石 京



幼稚園教育界は、平成二年度より新幼稚園教育要領（文部省）の実施の年を迎えました。この新

教育要領の中で特に重きをおいていることは、子どもが主体的に活動すること、環境にかかわって生活するという面があります。私どもは、この教育要領に述べてあることを基として、平成二年度には附属幼稚園の教育過程を編纂刊行し、一人ひとりの子どもの心身の発達をよりよく伸ばすこ

とが出来るようにと幼稚園教育を実施してまいりました。

幼稚園教育要領によれば、幼稚園教育の基本は環境を通して行う教育であるとし、これに関連し重視する事項として次の三点をあげています。

- (1) 幼児期にふさわしい生活の展開
- (2) 遊びを通しての総合的な指導
- (3) 一人ひとりの発達の特性に応じた指導

このことはお茶の水女子大学附属幼稚園の生活の中で、私どもが最も肝要と考えていることと全く一致しています。私どもは毎日の幼稚園生活の中で一人ひとりが満足出来ることと、幼児期にふさわしい日々が送れるようにと心をくだいています。そのために、子どもたちがのびのびと思う存分遊べる安全で豊かな環境を設定し、思ったことを心ゆくまでやっていける生活を保障していきたくと考えています。幼稚園に行ったら友だちと一緒に好きなことをいっぱいやるのだという思いは、子どもたちの心の中に大きな満足感となっていることと思います。

そして、日々の生活の中で、子どもは新しいことを考えたり、工夫したり、チャレンジしたり、達成したりしながら成長しています。また、人のかかわりの中で人に対する信頼感を育て、友だちの優しさ、思いやり、たくましさなどに触れながら自分自身も育っていきます。しかしいつも思

うように事が運ぶとは限りません。そのとき優しく、力強く支えてくれるのが教師の存在です。思い通りにいかないとき、挫折しないように手助けし、よりよい方向へ伸びていくことが出来るようにと私どもは指導をしています。決してあらかじめ路線を敷いたものによって、子どもを導こうとは考えていません。その時、その場に応じた状況の中で、最も適切と思われる方向を子どもとともに考えあいながら進めていく毎日の真剣な保育があります。幼稚園は外見上は楽しく遊んでいけばよいといったのどかさがありますが、その中にも私どもは人間を育てる教育、殊にその根本となる心を育てる教育をしているといった大きな責任と自覚を持って保育に臨んでいます。

更に大切に考えていきたいのは、一人ひとりの子どもの持っている個性を伸ばすことと、そのとぎに伸びようとしている発達の特性を見極め、その子どもに合わせた指導をするという点にあります。

す。これは画一的な教育の中では充分伸ばすことは出来ないものであり、自由な保育の中で自分のやりたいことが充分やれる、相手がいともそれを認めてくれるという環境の中で育つものです。夫々の子どもが充分に自己発揮出来るような環境と教育によってこそ、自分らしさを持っていきました幼児期が過ぎせると考え実施しています。

#### 四月の保育とねらい

このような考えを基本におきながら、附属幼稚園では日々の保育を進めています。その中では種々な日常が展開されていきます。それは事前に教育計画を立てて、それに従って進めていくといった固定的なものではありません。しかし四月は一年間のスタートの月であり、新しい子どもたちを迎え、あるいは新しい保育者を仲間を迎え、新しい一年間の始まる月なので、園としての充分な年間の教育計画を持ち、あるいは学期

毎、あるいは月毎の教育計画及びねらいというものをしっかりとたて、教師間でよく話し合っていくことが必要です。また、附属学校の使命とされている研究計画に関しても、その年度の始まりの月として年間の計画・進め方を十分に練っていくことなども、附属の教官としての必須のことと考えています。

こういった基礎的なものをふまえた上で、現実の子どもを迎え、その子どもたちに合わせながら変化させていくという教育の柔軟性こそが大切なのだと考えています。先ず子どもに合わせるという表現のもとに、保育者が白紙や無計画で教育の場に臨んだりすれば、その保育は場あたりの計画性のないものとなってしまいうでしょう。あるいは逆に教師のもつ計画を至上のものとして、子どもがそれに合わせることを余儀なくされるような保育であれば、それは教師主導型の保育となってしまうと思います。幼稚園の中心的存在はあくま

でも子どもであり、教師は子どもが主体的に活動していく環境をつくり、子どもを支えていく存在であります。このような教育理念をもちながら、附属幼稚園では現場の保育を行っています。

四月は何ととっても、新しく入園する子どもたちを迎えるといった大きな出来事があります。どんな子どもたちが園に入ってくるのだろうというワクワクするような楽しさがあります。子どもが安心して自分をゆだねることが出来るように暖かく迎え、そして自分を充分出していける日が早くくるようにとねがい、保育環境を整えたり、子どもについての情報を拡げたり、保育者としての保育技術の向上を目ざして努力したりしています。幼稚園は新しい子どもたちを迎え、そして年中

組、年長組に進級した子どもたちとともに、どんな一年間の生活があるのでしょいか。子どもたちの幼稚園に対する期待と不安と同じような思いが教師の側にもあります。その中で四月の保育として教師にとって肝要なことは、あせらないこと、そしてどこまで自分の忍耐強さを拡げていけるか、人としてどこまで優しく幼児にかかわっていきけるかなどが課題とされます。順調にいく日もあれば、その逆の日もあるでしょうが、子どもをわくの中に入れることをしないで、一人ひとりの子どもを全面的に認めていくことから、全ては出発していくと思えます。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)